

7-1 宮城県のとんかん診療地域連携事業 東北大学病院てんかんセンター

における活動の概要

東北大学病院てんかんセンター・医学系研究科てんかん学分野 中里 信和

まとめ

拠点化のメリットは大きかった。第一に、拠点化を受けた年の12月に東北大学病院てんかんセンターが発足して学内での立場が強化され、てんかん診療支援コーディネーターが配置されたこと、第二に、てんかん診療医療連携協議会の定期開催によって、宮城県や仙台市の保健福祉担当者との太いパイプができたため、これまでは医療機関・医師会・市民講演会などに限られていた啓発活動が、保健福祉センター、障害者雇用促進事業、産業医、発達相談支援、一般企業人事担当者、学校教育現場などに幅広く展開できた点である。遠隔システムを用いた全国的なてんかん症例検討会で宮城県だけでなく全国的にレベルを上げることができ、また、書籍の発行とツイッター、FM 仙台などのマスコミを活用することでてんかんの普及啓発活動を全国的に広めることができた。

1. 概要

てんかん診療に関しては一大学しかなく、全国で初めてのとんかん科があることで、てんかんの研修と普及啓発に非常に力を入れている。てんかん診療医療連携協議会を年に4回定期開催し、宮城県や仙台市の保健福祉担当者との太いパイプができ、保健福祉から就労、学校教育まで幅広い方面で数多くのてんかんの普及啓発活動を行うことができ、また医師会に対する講演、遠隔症例検討会により一次診療施設から三次診療施設までてんかんの診療レベルが上がり、拠点病院の診療実績も上がっている。

2. 宮城県のとんかん診療地域連携事業

1) てんかんの普及啓発活動

医師に対する講演、学校、ハローワーク、企業の就労担当者等に講演、学生への講義と、ソーシャルメディアのツイッター上でてんかんに関する情報発信し、患者とその家族の疾患学習用のイラスト本、てんかんを専門としない一般医師むけの書籍を発刊し、てんかんの普及・啓発に非常に役立っており、宮城県を超えて全国に情報発信されている。特にハローワークや就労担当者に対して、てんかんがあっても働けることを強く訴えている。また、医学部ではない学生にもてんかん、生命科学、生命倫理を講義し、多彩な方面で教育を行った結果、非医学部の学生がてんかん研究会を作るまでになった。

また、国際的なてんかん啓発キャンペーンの「パープルデー」に、FM 仙台の協力をえて、てんかん啓発キャンペーン「Purple Day in Sendai」を開催し、3月24日のFM 仙台のラジオ番組に登場した。また3月26日には仙台市地下鉄東西線国際センター駅多目的スペースにおいて、てんかん啓発セミナー・トーク、ミュージシャンによる演奏、てんかん啓発パネルディスカッション、関連グッズ販売などを実施、一般市民へのてんかん啓発に努めた。



N Nakasato & bot
@nkstnbkz

てんかんを知ることは脳の働きを理解すること。てんかんの診療は人生を考えること。てんかんがあるうがなかるうが、その方がベストの人生を歩めるような社会を。 epilepsy.med.tohoku.ac.jp
favotter.net/user/nkstnbkz

📍 Sendai, Japan



- ・仙台市障害者就労支援センター 齋藤涼平氏
- ・東北大学てんかん学分野准教授 神一敬氏
- ・東北大学病院医療ソーシャルワーカー 大竹茜氏

総司会：石垣のりこ（エフエム仙台）
展示コーナー：株式会社特殊衣料、就労支援事業所、日本光電東北株式会社、日本てんかん協会宮城県支部

当日のパンフレット 東北大学 てんかん啓発サークルPIE 中里教授の講演 金子ヤスタカバンド ファッションコンテスト パネルディスカッション

2) 医師に対する研修と診療レベルの向上

遠隔会議システムを通じて、宮城県内外のてんかん診療関連の全医療業種に対し、難治例の入院精査結果に基づいた症例検討会を毎月行った。この症例検討会は、日本てんかん学会の専門医のクレジットにもなっており、参加者数は実際の会場への参加者が、約 50 名、遠隔会議システムにより全国 10ヶ所程度からの参加者数が 30 名程度であり、延べ総数 300 名を超えている。当初予定の 1 年間 500 名のペースを大幅に超えた実績となっている。この遠隔システムを用いた教育システムなしにはてんかん診療の普及にはならないと思われる。

3) 東北大学てんかん科の活動

てんかんかでは新患は入院してもらってビデオ脳波モニタリングを含めて総合的に評価し、他院に紹介しており、また人材を集めて育成し輩出することを目指している。決して自分のところで抱え込めを目標としている。決して自分のところで抱え込まない。

ビデオ脳波モニタリングはてんかんか否かの診断に非常に有用で、人生を変えるほど重要である。

東北大学遠隔てんかん症例検討会

★ 北大・札医
★ 中村記念

★ 東北大
★ 群馬大

★ 気仙沼
★ 筑波大
★ 獨協医大越谷

★ 名古屋大
★ 信州大

★ 九州大
★ 熊本大
★ 潤和会(宮崎)

★ 愛媛大
★ 徳島大

★ 大芝医院
(南アルプス市)

日本てんかん学会
専門医クレジットの認定

4) 事業の指標

東北大学病院全体の、てんかん患者の外来新規受け入れ件数、てんかん患者の入院患者受け入れ件数、長期間ビデオ脳波モニタリング検査数はいずれも予定より多かった。

3. 成果と課題・問題点

てんかん地域診療連携整備事業の意義は、院内の大義名分ができ、センター化、コーディネーターの配置でできたことである。また、行政とのつながりが太くなり、幅広い方面でたくさんのてんかんの普及啓発活動ができるようになったことも大きな成果である。

課題は、事業予算と診療報酬（DPC）が限定的である、患者数が多く医療も相談も「焼け石に水」、患者の声が上げにくいので啓発に工夫が必要な点である。圧倒的な患者数に対し、社会資源は少ない。てんかん患者本人だけでなく、家族や社会との関係を考えて、本人の幸せのためには、ソーシャルワーカー、臨床心理士をもっと活用すべきである。

